

## 第1期 | 3月15日(水)－5月13日(土)

<第1期テーマ>

# すべての人は、 この世に一人しかいない。

多くの人が抱きがちな「アイヌって〇〇」「精神障がい者って〇〇」のようなステレオタイプではない、それぞれの写真家が縁を紡いで真摯に一人一人と向き合った写真から、遠い存在だと思っていた様々な立場の人たちをより身近に感じていただけると確信しています。(宇井眞紀子)



## 落合由利子 働くこと育てること

人は働き、そして育てることを通して、たくましく現実に向き合う。乳幼児を抱えながら仕事をする男性・女性たちそれぞれの「生きる力」に、自身も乳幼児二人を育てながら、等身大で向き合ったドキュメンタリー。

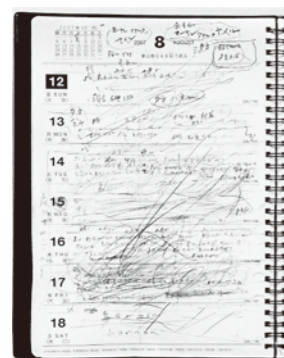
おちあいゆりこ ■略歴 1963年、埼玉県生まれ。1989年から1992年まで、ベルリンの壁崩壊直後の東欧の人々、ルーマニアの農村を撮影。雑誌「母の友」(福音館書店)に「戦争は知らないけれど」連載。著書に「働くこと育てること」(編はあちゃんと90年の旅：幻の旧満州に生きて)他



## 大西暢夫 ひとりひとりの人—僕が撮った精神科病棟

障害者のなかでも特に、精神障害者に対しては「こわい」「わからない」というイメージをもつ人はまだ多い。彼らは日々どんな生活を送り、何を感じているのか。大西は精神障害をもつ人々の豊かな表情を写し出す。

おおにしのおぶ ■略歴 1968年岐阜県生まれ。ダムに沈む村、職人、精神科病棟、障がい者などを取材。2010年から東京から故郷の岐阜県揖斐郡池田町に拠点を移す。東日本大震災の取材と支援も行う。著書に「ぶたにく」「津波の夜に～3.11の記憶」「ここで土になる」他。映画に「水になった村」(2007年)。



## 太田順一 父の日記

自身の父親が遺した日記。認知症により施設に入ってから、毎日かかさずに書かれたその日記は錯乱していく。人は誰もが古い、死んでいく。その歩みの痕跡を確かめるように、一頁一頁と日記はめくられていく。

おおたじゅんいち ■略歴 1950年奈良県生まれ。写真集に「女たちの猪飼野」「大阪ウチナンチュ」「ハンセン病療養所 隔離の90年」「化外の花」「群集のまち」「父の日記」「無常の菅原商店街」「遺された家」など。著書に「写真家 井上青龍の時代」他。第34回伊奈信男賞受賞。

### <第1期テーマ監修> 宇井眞紀子

ういまきこ ■略歴 1960年千葉県生まれ。1992年、子供を連れてアイヌ民族の取材をはじめ。2009年、全国のアイヌ民族100組を撮影するプロジェクト開始。2017年4月、写真集「アイヌ、100人のいま」刊行予定。第28回東川賞特別作家賞受賞。

スライド上映&トークセッション ■会場：東京都人権プラザ 1Fセミナールーム

4月15日(土)午後2時～4時 出演：宇井眞紀子・落合由利子・大西暢夫・太田順一

## 第2期 | 5月20日(土)－7月1日(土)

<第2期テーマ>

# 生きる。

人々の日常のなかに入り込んで撮影する写真家にとって、どのような立場に身を置くかがとても重要になります。現実には複雑です。「強者と弱者」「善と悪」というような二元論だけではありません。あらゆる場所、例えば戦火の国で、路上の片隅で、障がい者施設で、時間をかけて注意深く自分の立場を見つけていきます。そうやって、差別や偏見が写真に入り込むことを拒絶するのは、(高松英昭)



## 松澤コウノスケ 私の宝もの—知的障害施設に暮らす人々

知的障害者に対する無理解は偏見と差別を生む。読み書きや人間関係の構築がたとえ不得意でも、「人としての感情に障害があるわけではない」と言う松澤は、悩み、苦しみ、怒り、笑う、そんな当たり前の彼らの日常を写し出す。

まつざわこうのすけ ■略歴 1965年埼玉県生まれ。障害者支援施設勤務を経て、日本写真芸術専門学校で写真を学ぶ。その後フリーに。報道写真家・樋口健二氏に師事。フォトホルタージュ「私の宝もの」(サンデー毎日、2001)など。



## 橋本弘道 東京タワー

襲撃の恐怖と背中合わせで路上に寝入る男たち。橋本の写真は、彼らもまた、行き交う人々と同じこの都市の生活者であることを呼び覚ます。異なるのは、彼らには人が人らしく生きるための「生存権」が、切実なものとしてされている点である。

はしもとひろみち ■略歴 1953年兵庫県生まれ。写真スタジオ勤務を経て、25歳でフリー。1998年、写真集「東京タワー／通天閣」で第4回週刊現代ドキュメント写真大賞特別賞。同年、ドキュメントビデオ「夜の雨 東京野宿」作成。代々木公園、新宿、山谷などの路上生活者を取材した「ひとよ」(「Documetary 写真」2005年)など。



## 亀山 亮 AFRIKA WAR JOURNAL

たとえ戦闘が終わってもこの人たちの戦争は一生続く。亀山は言う。なぜなら被害者も加害者も「魂を破壊されている」からだ。世界の紛争地を歩いてきた写真家が捉える「遠くの戦場」と今ここに生きる自分をつなぐ回路を探る。

かめやまりょう ■略歴 1976年千葉県生まれ。1996年よりサバティスタ民族解放軍の支配地域など中南米を撮影。2000年、パレスチナ自治区でインティファダの取材中、左目を失明。アフリカの紛争地に8年間通い、2012年「AFRIKA WAR JOURNAL」で第32回土門拳賞受賞。

### <第2期テーマ監修> 高松英昭

たかまつひであき ■略歴 1970年生まれ。新潟県育ち。日本農業新聞を経て、2000年からフリー。食糧援助をテーマにアンゴラを取材、「路上で生きる人々」をテーマに取材を続ける。インドでカーブ制度に反対する不可触賤民の抗議行動ラレーを取材。著書に「STREET PEOPLE 路上に生きる85人」。

(各回定員70名/無料/当日先着順/情報保障及び託児につきましてはお問い合わせ下さい。)

7月1日(土)午後2時～4時 出演：高松英昭・松澤コウノスケ・橋本弘道・亀山 亮 (予定)

## 第3期 | 7月8日(土)－8月19日(土)

<第3期テーマ>

# かき消される小さき声。

「ハンセン病」「水俣病」。差別と偏見により患者たちは「人」として生きることが許されませんでした。同様な人権侵害は形をかえて今も「福島差別」に脈々と続いています。これを少しでも減らすにはどうすればよいのでしょうか。趙根在氏、石川武志氏による患者たちの日常を追った写真の中に一つの答えがあると思います。(片野田 斉)



## 趙 根在 ハンセン病を撮り続けて

炭坑夫だった趙がハンセン病療養所で出会った同胞から受けた「無限のやさしさ」とはいったいどこから来るのだろうか。趙が写したハンセン病の奥深い世界を通して、一世紀に及ぶハンセン病をめぐる人権侵害の歴史をたどりなおす。

チョウグンジェ ■略歴 1933年－1997年。愛知県生まれ、在日朝鮮人。十代半ばから炭坑で働き、二十代半ばに上京。写真家を志す。1961年頃、ハンセン病療養所に在日同胞がいることを知り、群馬県の栗山楽園で患者たちと向き合う生活を始める。「趙根在写真集—ハンセン病を撮り続けて」。協力：国立ハンセン病資料館



## 石川武志 MINAMATA NOTE

ユージン・スミスのアシスタントとして1971年から3年間「水俣病」に向き合った石川は、40年後、再び水俣へ向かった。公式確認から60年余り。母親の胎内で被害にあった胎児性患者たちの現在は石川の眼にどう映ったのか。

いしかわたくし ■略歴 1950年生まれ。1971～1974年、ユージン・スミスの水俣取材でアシスタント。1975年フリーに。1980年、インドのトランスジェンダー社会「ヒジュラ」の取材開始。写真集に「インド第三の性」(MINAMATA NOTE—1971～2012)。

### <特設> 写真集を読む、人権を見る。

本展に参加する写真家11名の  
写真集およびそれぞれの心に残る一冊を  
一堂に展示します。

### <第3期テーマ監修> 片野田 斉

かたのだひとし ■略歴 1960年、東京都東村山市生まれ。明治学院大学卒業。2001年、9.11米国同時多発テロ事件に衝撃をうけ、各地の紛争地を取材。2010年、東村山市にあるハンセン病療養所に暮らす山内きみ江夫妻の取材を開始。著書に「きみ江さん—ハンセン病を生きる」他。

7月29日(土)午後2時～4時 出演：片野田斉・石川武志